

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

2013年10月5日

氏名 佐藤繭香

学位論文題目 : Communicating Equality or Femininity?: Visual Propaganda
of the Edwardian Women's Suffrage Movement

(女性らしさか平等か? : エドワード朝時代女性参政権運動の
視覚的プロパガンダについて)

I 論文の要旨

本論文では、エドワード朝時代の女性参政権運動が、行進、演劇、バザーそしてポスター等を使用し、どのように視覚的なプロパガンダを展開したのかに注目し、当時の社会からどのように影響を受けたのか、また逆にどのような影響を与えたのかを明らかにしている。19世紀の女性参政権運動とは異なり、エドワード朝時代の女性参政権運動を主導した女性社会政治同盟(WSPU)、女性参政権協会全国同盟(NUWSS)、そして女性自由連盟(WFL)は、視覚的な表象を利用したプロパガンダを多用し、重要視した。19世紀には、大衆消費社会が発展し、大衆に向けた視覚的なアピールは大きな効果を持つようになっていた。20世紀初めの女性参政権運動の視覚的プロパガンダは、当時の支配的なジェンダー、階級観の影響を受けずにはいられなかった。

女性参政権組織は、多様であり、活動の手段も異なっていたにも関わらず、視覚的なプロパガンダで使用するモチーフは非常に似通っていた。それは、女性参政権組織に協力してプロパガンダを提供する女性芸術家参政権同盟、女優参政権同盟、サフリッジ・アトリエやその他の協力者たちが共通していたことにも起因する。視覚的に女性らしさを提示することが大衆を説得するためには何よりも重要であり、視覚的な女性らしさは、当時のアーツ・アンド・クラブ

ツ運動などの影響を多分に受けていた。このように、女性参政権運動の視覚的プロパガンダは、伝統的なジェンダーや階級規範に真っ向から挑戦するものではなかったが、第一次世界大戦勃発直前になると女性参政権組織は女性らしさだけでなく、合理性、組織化といった近代的な価値観を視覚的なプロパガンダを同時に含めるようになっていた。

第一次世界大戦が勃発すると、WSPU と NUWSS は戦争協力のため、活動の停止を決定する。ある歴史家たちは、第一次世界大戦に対する女性の貢献によって、女性の活動領域が拡大したと主張する。しかし、注意しなければならないのは、女性の貢献は、あくまでも戦争に赴いた男性の補完という立場であることは変わらなかったという点である。女性参政権運動で使用されている働く女性の表象をみると、活動領域を広げ活躍する近代的な女性像はすでに登場しつつあったことが伺える。女性参政権運動の表象は、ヴィクトリア時代の伝統的な女性像と第一次世界大戦中に登場した近代的な女性像の間を繋げる役割を果たしていた。女性参政権運動の表象は、女性の活動領域の拡大を示しつつも、既存のジェンダー規範に大きな変化はなかった。本論文は、こうした女性参政権運動の実態をこれまで十分に活用されてこなかった視覚資料を用いて明らかにしている。

以下、各章の概要を示す。

第 1 章 女性参政権運動における視覚的表象を扱った先行研究

従来の研究者は、行進、ポスターを扱ってはいるが、フェミニスト的視点が強い。例えばティックナーは、女性参政権運動の表象は伝統的なジェンダー規範を批判する目的を持っていたと指摘したが、本論文では、女性参政権運動のプロパガンダは参政権活動に対する世間の批判を払拭しなければならなかったため、単純に新たなジェンダー規範を提示することはできなかったのではないだろうか、と問題提起する。その上で、女性参政権運動の視覚的なプロパガンダは、否定的なイメージが根強かった参政権運動と当時の伝統的なジェンダー観のせめぎ合いのなかで作られたのではないかと論じている。

第 2 章 女性参政権運動の歴史

この章では、エドワード朝以前の女性参政権運動とエドワード朝の同運動との差異を検証し、重要な差異が視覚的なプロパガンダの利用法であったことを

指摘している。

19 世紀の女性参政権運動

ランガム・プレイス・サークルに集うようなフェミニストたちにとって、女性参政権の獲得は主要な問題ではなかった。女性参政権の獲得以前に、女子教育、既婚女性の財産権、性病法撤廃運動、女性の地方選挙権など解決すべき問題が多様にあり、女性参政権という問題に一元的に取り組むことはできなかったことを、当時の史料をもとに論じている。

20 世紀の女性参政権運動

19 世紀と 20 世紀の女性参政権運動の大きな違いは、まず、その運動の規模、それから活動方法が多様化し拡大したことである。1906 年には、女性社会政治同盟が戦闘的行為（ミリタンシー）を活動手段として採用した。19 世紀後半に発展した社会主義運動は、行進やバナーなどの視覚的プロパガンダを利用し始めていたが、女性参政権運動がさらに視覚的なプロパガンダを発展させた。これらについて、新たな視覚資料を活用しながら論じている。

第 3 章 行進と女性参政権運動

この章では、女性参政権運動で行われた大規模な行進を取り上げている。特に二つの組織、女性社会政治同盟(WSPU)と女性参政権協会全国同盟(NUWSS)が大規模な行進の企画に熱心であった。大規模な行進は、女性参政権を大衆に宣伝するまたとない機会であり、組織は、色彩や花などを使用し、女性らしさを提示し、参政権活動家も女性らしいということを伝えようと試みたことが検証されている。

The WSPU

ミリタンシーが激化すると人々はサフラジェットたちを「非理性的な女性たち」と批判するようになった。そうした批判を受け、女性らしさだけでなく、組織化された行進というものを見せるようになっていく。

The NUWSS

NUWSS の行進で使用されたバナーは歴史的な女性を示すものであった。この団体は、過去から現在までの女性の歴史を提示し、歴史家 E. ホブズボウムが示すところの「伝統の創造」をつくりだそうとした。

第4章 行動する女優たち：女優参政権同盟の活動

この章では、1908年に設立された女優参政権同盟(AFL)（女優や舞台関係者が集まった組織）に焦点をあてて論じている。

この団体の設立目的は、

- 1). 舞台関係者に女性参政権の必要性を宣伝すること。
- 2). 教育的な方法を用いて（演劇を通じて）、運動のために働くこと。
- 3). あらゆる女性参政権組織にサービスを提供すること。

であった。

ウェスト・エンドでの年次公演

AFLはウェスト・エンドの劇場での公演も行いつつ、女性参政権組織の地方支部などの要請にもこたえて芝居を提供した。年次公演では、仮装劇と一幕芝居を組み合わせたが、仮装劇では、女性の美しさに焦点をあて、女性参政権運動に関わる女性によって書かれた一幕芝居では、中流階級や労働者階級の結婚や労働などの現実的な問題を扱った。仮装劇も合わせて上演することによって、一幕芝居の急進的なメッセージを和らげていたのである。

イースト・エンドでの活動

1910年ごろより、労働者階級女性の結婚生活の問題点を描いた芝居を公演するなどして、労働者階級女性を運動に取り込もうと試みるが、労働者階級女性の組織化は困難であると気づくようになった。

第一次世界大戦が勃発すると、主要な女性参政権組織が活動を停止したため、AFLのサービスも求められることがなくなっていった。

第5章 展覧会、バザー、エンターテイメント

この章では、女性社会政治同盟、女性自由連盟(WFL)、女性参政権協会全国同盟によるバザーに着目している。バザーは、商品の売買、展覧会、演劇やコンサートなどを含むイベントであり、女性参政権を宣伝する恰好の機会であった。買い物だけでなく、展覧会やエンターテイメントによって、観客を教育しようとしたのである。また、WSPUやWFLという戦闘的手段をとる組織にとっては、バザーは女性らしさを視覚的に宣伝する機会でもあった。

バザーの会場装飾

組織の色などを会場装飾に使用することによって、組織のアイデンティティを確立しようと試みた。会場装飾には、アーツ・アンド・クラフツ運動の影

響が顕著にみられる。

売買活動

商品もプロパガンダの一部であった。子供用衣服や玩具、装身具、ブラウスなどの衣服、食品などは、参政権活動家も母であり、妻であることを示すものであった。また、参政権運動にまつわる独自の商品も販売された。

展覧会とエンターテイメント

様々な展示によって、女性参政権組織は、直接的、時には間接的に、女性参政権の宣伝を試みた。例えば、WSPU と WFL は、ホロウェイ刑務所の監獄を再現し、参政権活動家が監獄に入っている様子を見せた。エンターテイメントには芝居からコンサート、ダンスまで様々なものがあったが、その多くは AFL によって提供された。

第6章 労働者階級女性の表象

この章では、労働者階級女性の表象が女性参政権運動のなかでどのように使用されたのかに着目している。労働者階級女性の表象は、エドワード朝時代の女性参政権運動の始めより使用されていたが、多くの場合、疲労し、辛苦の中にある労働者階級女性であることが多かった。芝居や小説、ポスターなどにも登場したが、やはり貧しく、家庭の面倒をみながらも酒飲みの夫を抱え、苦労する女性の姿が多かった。活動を進める一方、女性参政権を議論する超党派の議員による調停委員会が作られ、1910年より毎年議会に法案が提出されたが、法案成立には至らなかった。プロパガンダの成果がないと評価され始めた1912年頃、労働者階級の女性の表象に変化がみられるようになった。中流階級女性たちの保護を必要とする女性像というよりも、力強さ、生き活きとした様子、現実性を強調し、労働そのものにより焦点を当てるようになった。働く女性を賞賛する女性参政権運動の表象は、第一次世界大戦によって大量に登場する働く女性の表象につながっている。

第7章 結論

この章では、論文で明らかになったことをまとめつつ、更にそれが第一次世界大戦とどう関わるのかを論じている。第一次世界大戦が勃発すると、WSPU と NUWSS は、運動を一時中断することを決定し、戦争に協力する姿勢を明確にした。WSPU は、運動を宣伝していたのと同じ手段（行進）で、女性の戦争

協力を大衆にアピールした。行進では、歴史的な女性など女性参政権運動と同じ表象を再び使用しながらも、労働者というものの焦点をあてるようになっていた。働く女性の表象は、戦争によって、突然、表れたわけではなく、前章でみたように、女性参政権運動のプロパガンダの中にすでに登場しつつあるものであった。

第一次世界大戦で働く女性の数は拡大した。こうした女性はそれまでのヴィクトリア時代的な性別役割分担を乗り越える存在でもあったが、戦時動員された働く女性たちはあくまでも戦争へ行った男性たちの銃後を守る存在であり、男性労働者を補完するものであった。女性参政権運動で使用された働く女性の表象は、ヴィクトリア時代の伝統的な女性像と第一次世界大戦中に登場した働く女性像をつなぐものであるが、それらは、女性の活動領域の広がりをしめしつつも、ジェンダー規範は変わらなかったことを示している。

II 論文審査の要旨

本論文の学術的業績としては、第一に、従来では女性参政権運動の表象は伝統的なジェンダー規範を批判する目的を持っていたととらえられていたが、それにとどまらず、女性参政権運動のプロパガンダは参政権活動に対する世間の批判を払拭しなければならなかったために単純に新たなジェンダー規範を提示することはできず、当時の伝統的なジェンダー観のせめぎ合いのなかで作られた、という点を明らかにした点である。第二に、この議論の論証のために、これまで十分に用いられてこなかった数多くの視覚資料に幅広くあたり、エドワード朝を中心とした女性参政権運動の理解を深めることに貢献した点である。同運動をここまで網羅的に、テキスト史料に加えてさまざまな視覚メディアを検証して論じた前例はなく、その学術的価値は高い。また第三に、女性参政権運動で使用された働く女性の表象は、ヴィクトリア時代の伝統的な女性像と第一次世界大戦中に登場した働く女性像をつなぐものであることを実証した点である。これにより、本論文は、1918年の女性参政権の獲得に関する歴史的解釈に新たな視座を提供できたといえる。

審査においては、いくつかの問題点や今後の課題が指摘された。まず、数多くの資料の発見があるにもかかわらず、時々議論の運びが拙速で結論にすぐに持って行こうとする傾向がみられた。また、当時の他の社会運動である社会主義運動のプロパガンダとの関わりやアーツ・アンド・クラフツ運動との具体的

な影響関係に、もっと踏み込んで議論してもよかったと思われる。さらに、当時のイギリスの女性参政権運動が同時代の他国での同様の動きとどのように連携していたのか、あるいは帝国属国での動きとはどのように連動していたのか、といった国際的視野からの議論がやや限られた印象で、これにたいして一定の見解を示すに至らなかったが、これは今後の重要な課題のひとつであろう。

審査結果

ウィメンズ・ライブラリー、ブリティッシュ・ライブラリーをはじめとした膨大な史料を渉猟し、その検証と分析を丁寧に行い、エドワード朝時代の女性参政権運動が、行進、演劇、バザー、ポスター、映像等の視覚メディアを幅広く駆使し、プロパガンダに利用した実例を丹念に抽出したところから、当時の女性参政権運動が社会的規範からどのように影響を受けたのか、また逆にこれにどのような影響を与えたのかを論じている。とりわけ働く女性を賞賛する女性参政権運動の表象が第一次世界大戦によって大量に登場する働く女性の表象につながっていることを明らかにした点は、学術的意義が大きい。また、収集された視覚資料は今後の類似の研究にとっても貴重なデータベースとなるであろう。ジェンダー論、歴史学、視覚文化論に目配りをした学際的なアプローチも、当時の女性参政権運動の実態解明に役立っている。

以上の理由により、審査委員会は、申請者に文学博士の学位を授与することを全員一致で決定した。

論文審査員 (主査) 津田塾大学 教授 早川敦子
教授 高橋裕子
准教授 菅 靖子
名誉教授 金谷展雄

東京大学名誉教授・放送大学教授 草光俊雄